

三五八本の銅劍はどこで作られたのか？

## ウヤツベの宮処かその周辺

柿原 高身

### 一、ユメ物語

弥生時代中期の終わり頃から後期の初め頃にかけて、西出雲に「原イヅモ国」ともいうべき首長国連合体があつて、邪馬台連合国の巫女王ヒミコにも比すべき巫女王ウヤツベクを中心に、この地方に勢力を張つていた。かれらは、簸川平野の奥に美しい姿を見せてたたずむ仏経山を神の山として崇め、毎年、春と秋の大祭を、三五八本の銅劍が発見された、ここ、宇夜の里の神庭の広庭で傘下の首長達や村々の有力者達を集めて行なつてきた。

そして、この大祭が終わると、祭りの主宰者であり、連合王国の統裁者でもあるウヤツベは、この日のために作り上げ、神に供えて神霊を宿らせた銅劍（神劍）を、参列首長のひとりひとりに一本ずつ、引き出物として与え、これを貰った各首長は、持ち帰つて神として祭り、連合王国への参加と結束のあかしとして伝世した。所有する銅劍の数が、その首長の勢力のパロメーターとなつていたのかもしれない。このことは、畿内を中心とする銅鐸圏で、所有する銅鐸の数が、その豪族の勢力に比

例するとされていたらしいことも合致し、また、古代のヴェトナムの王達の銅鼓の数と勢力の関係説を見ても、東アジアに共通の流れとみることができよう。

そのために、この銅劍は、この神庭の祭祀の場に近い場所で、朝鮮半島南部地域から渡つてきた工人達によつて毎朝、大祭の日に間合うように作り続けられたのである。

そして、新しい勢力に打ち倒されるか、国譏りをさせられるかの危機に直面したとき、首長たちは、再びここに銅劍を持ち寄つて、滅亡の儀式として、これを一括埋納した。痛痕の想いを込めて、いつの日かの再興の日を願つて、思い出深い神庭の広庭の見下ろせる低い丘の斜面に埋めた彼等の心が胸をうつ。

これは、私のユメ物語語りである。しかし、これが、単なるタワゴトに過ぎないのか、悲劇の古代人の史実の訴えに繋がるものなのか、古代史関連の史料を尋ね歩いて、検証をしてみたいと思う。

## 二、検 証

### ○ 検証一―大和王権無縁

『記紀』は、出雲神話に、その(神代)の卷Ⅴの三分の一近くものスペースを割きながら、西出雲地方の古代に関しては、全く口を閉ざして語ろうとしない。それどころか、本来、東出雲の豪族が奉斎していた筈の(大)国主(を)かつぎ出して、いきなり杵築の地に宮を建てて移しながら、大和王権は、その間の経緯や事情について説明もしていない。西出雲にあった勢力のことは知らなかったのか、知っていても敢えて無視したのか、いずれにしても、三五八本の銅剣については、製作に関しても埋納に関しても、全く無縁で、この銅剣の授与者でないことはもち論、畿内地方がこの銅剣の製作地でなかったことは明白である。

### ○ 検証二―古墳の年代推移から

松前健氏は、『出雲神話』の中で、次のように説かれる。

出雲地方の古墳の年代の推移からみて 出雲西部一帯に広く拡がっていた古い勢力を、東出雲の「意宇」の勢力が、打ち倒したか、国譲りさせたかして併合した。その時期が、弥生中期から後期の初めの頃……。

時、あたかも、荒神谷に銅剣が埋納された時期と合致する。そうするとこの、東出雲から進出して、西出雲に移って全出雲の王者となった意宇の人々も、この銅剣の製作にも埋納にも、全く不知の人々であったとい

うことになる。むしろ、「このとき、征服された西出雲連合王国の人々の、血涙の『陰匿、埋納の儀式』が、いつの日にか晴れて取り出す日に来ることを願いながら、行なわれたのだろう」と、松前氏は言っておられる。

### ○ 検証三―古伝承の鍛冶神

さて、ここでもう一度『日本書記』(神代卷Ⅴ)の中から、銅剣製作者をうかがわせる説話があるかどうかを探ってみよう。紀は、

新羅国に天下ったスサノヲが、「この国には居らまく欲りせず」といって、東行して、出雲の簸ノ川上の鳥髪(の)峯に移った。

と言い、その子に(ヒノ)ハヤヒノミコト(が)いたとあるが、これは「フイゴの神の名だそうで、日本には、銅器と鉄器の製作技術が、弥生式土器を焼くに必要な千度近い火力とともに、弥生時代の初め頃に殆んど同時に入ってきたといわれ、銅器は祭器に、鉄器は武器となって発達していったといわれているが、この神達から産銅、産鉄一族との関わりがうかがわれ、ヒノハヤヒノミコトの子孫が(アマツ)マウラ(あるいはアマツマラ)、またの名(アメ)ノヒトツメノカミ(という鍛鉄神だという。この『出雲国風土記』の話は示唆的である。

### ○ 検証四―鍛冶部の火の神と一眼の神

この伝承に関連して、松前健氏は、『出雲神話』の中で、次のような興味深い説を述べておられる。

『出雲国風土記』には、△大原郡斐伊郷の条▽に「ヒノハヤヒコという神がこの地に居ましたことにより、種」と名付けられた」といい、地名起源説話があげられているだけであるが、この「ヒノハヤヒコ」は、鍛冶部の奉じた「火の神」の名であつたらしい。

火の神、カグツチを、イザナギが殺したときの血から生まれたという「ヒノハヤヒノミコト」なども、おそらく類似の神で、火の燃えあがる力の速やかであるのを讃えた神名である。

『新選姓氏録』によると、燻之速日命は、その一二世の孫の「麻羅宿禰」が祀っていた。「麻羅」、「真浦」などというのは、鍛鉄に關係ある名である。

『記・紀』の天石屋神話での鍛冶神「アマツマウラ」、または「アマツマラ」が、「鐸」をつくつたという話が思い浮かべられる。「アマツマウラ」は、「古語拾遺」では、「アマノマヒツノミコト」とも呼ばれ、「一眼の神」である。

古代ギリシャの一眼の巨人「キクロペス」や、アイルランドの一眼の巨魔「バロル」などが、鍛冶と結びついているように、世界的分布をもつ「神冶神一眼」の信仰に繋がるものである。

『出雲国風土記』△大原郡阿用郷の条▽で、「目一つの鬼」に農夫が食われ、「アヨ、アヨ」と叫んだという話がある。

紀伊の熊野の山中に出没すると信じられた「踏鞴」または「一本踏鞴」は、福土幸次郎氏などによると、やはり、もと、踏鞴、すなわち「フイゴ」を使用して鍛鉄に従事する冶金業者たちの守り神であつ

た「雷神」が妖怪化したものであるという。

出雲の「目一つの鬼」も、同様な、鍛冶神の墮落した姿なのである。ギリシャの「キクロペス」も、「オデッセイ」では、たんなる「人食い鬼」とされている。「ヒノハヤヒコ」が「一眼神」かどうかはわからないが、斐伊川の鍛冶神の奉じた「火の神」であつたことはたしかであろう。

古伝承のいう「鍛冶神」や「火の神」が、斐伊川流域に居たというこの説は、弥生中期から後期にかけて、この土地で、祭器としての銅剣が作られていた可能性を、かなり顕著に示しているといえないだろうか。

#### ○ 検証五―八百度の火力と半島の技術

ここで、鈴木武樹氏著、「日本古代史99の誅」の説に耳を傾けてみよう。

青銅器を製作できる温度は、摂氏八百度以上である。しかし、この温度は、新石器（縄文）時代のヤポネシアで用いられていた土器（縄文土器）の製作技術では手に入らない。つまり、焼き火程度の火力では、青銅器は作れないのである。

ところが、水踏栽培の開始とほぼ同じ頃、所も同じ九州島の北部で製作され始めた赤色土器は、窯を用いて八百度の温度を求めなければ作ることができない。いいかえれば、青銅器を鑄造する技術と、新式の赤色土器（弥生式土器）を焼く技術とは、必ずやセットになつてた筈である。

そうなれば、その先の推定は極めて容易である。すなわち、西暦前二百年前後に九州島の西北部で作られ始めた赤色無文土器は、すでに青銅器鑄造の技術を知っていた土地からもたらされた技術でもって製造されたものである。

従って、この、いわゆる「弥生式土器」は、その名がいかにも日本的であろうと、起源は、朝鮮半島に求めるべきで、かの地の「無文土器」こそ、その原型だといえる。

○ 検証六―男根模型は語る

話をもとに戻すが、「アマツマラ」の「マラ」は、中国語では男根を意味し、この産銅・産鉄の神を祭る一つのでだとしてシンボライズされたと思われる。石作り（木製もあったかもしれない）の男根の模型が、中国山地の中腹や山麓の谷合いや峠の片隅などに、いかにも「もの言いたげ」に祀られたり、置かれたりして散見される。その付近には銅鉱もあつたらしく、昔、産銅に従事した人々が住んでいたとみてよいように思われる。

○ 検証七―出雲式銅劍

森浩一氏は、『歴史読本』▲謎の三種神器▽の中で、

荒神谷遺跡の銅劍は、「出雲式銅劍」という言葉があるように、長さが一〜五四センチメートルという、概して、北九州の弥生時代の銅劍に比べて長いものである。

といっておられ、そうすると、北九州もこの銅劍の製作地ではないということになり、ましてや、西出雲の国々は、畿内説（検証一）でも、九州説でも、ヤマタイ国とは無縁な国であるということになり、スサノヲ伝承が暗示するように、古くから、親潮に乗って、朝鮮半島南部の弁辰、辰韓方面から出雲に渡ってきた工人達が、西出雲の地で作ったものがこの銅劍であつたのだらうということになる。

○ 検証八―「原イツモ国」考

門脇禎二氏の「銅劍、銅鐸、銅矛と出雲王国の時代」の中の説を聞いてみよう。

「原イツモ国」は、一世紀前後頃より「キツキ地方」を中心に形成されはじめ、傘下の人々の齋く神は、『出雲国風土記』が「神奈備山（仏経山）に祀るといふ」キヒサカミタカヒコで杵築から三瓶あたりまで、その勢威は及んでいた。

さらに、『古代出雲王権は存在したか』で、

この銅劍が埋められたということの意味をどうとるかにかかわるわけですね。つまり、この銅劍埋納が、それを持っていた有力者、あるいは有力な集団が、非常な危機感に陥つたり、圧迫を受けたり、そういうことにかかわっていたとするならば、そういう集団に危機をもたらしただものは何かということになるわけです。

そうしますと、仮に手掛りを『出雲国風土記』の中などで考えますと、出土しました地点は、出雲郡の健部郷であり、ここでは、一番古

くは、クウヤツベ神々がいたところですが、やがて神門臣古禰という新興の有力者に押えられる。ここで支配勢力が交代したという可能性がひとつあるわけです。ですから、そういう現地の、出雲の西部の中での古いものと新しいものとの勢力の交代という可能性がある。

それと、もう一つは、今度は、やがて、出雲の東部ですね。東の方の「意宇」を中心とした勢力が圧迫を加えてきたと、そういう可能性がある。

それから、南の山越えに、吉備の勢力が、まあ、これは、事実、考古学の先生がいろいろおっしゃっているように、吉備の出雲西部に対する関係は、かなり早くからいろいろあると、そういうことですから、吉備の勢力が出てきた可能性がある。

と言っておられるが、この説から類推すると、東出雲や吉備の勢力も、この西出雲の「原イツモ国」の人々に圧迫を加えて、祭器（権威のシンボル）たる銅剣を埋納せざるを得なくさせる原因はつくっても、その銅剣を作って与える存在ではなく、この銅剣の製作地とは全く無縁であったということになる。

○ 検証九一十六鼻、韓鎗社、銅鋳露頭地

ここで、速水保孝氏の示唆に富んだ話を、『古代出雲王権は存在したか』の中から伺ってみよう。

今度銅剣が出土した出雲国、これは『風土記』の呼び名ですが出雲国出雲郡出雲郷、その隣の、古くは「宇夜里」、『風土記』時代では

健部郷の「神庭荒神谷」から出土しているんですが、その「原出雲国」がかつてあった地帯は、『風土記』で出雲郷ということで表現される地帯でして、今の「仏経山」、つまり出雲の神名火山から、この対岸の、最も早く斐伊川の沖積作用でくっついたといわれる、いわゆる国引きの原像がみられる島根半島の河下地区、「十六鼻地溝帯」の河下、あのあたりが、実は朝鮮半島からの渡来人（主として新羅人）の定着地なんです……。

だから、ズバリ言いました、今日、どこで一番銅鋳の露頭が見られるかといえますと、『風土記』でいう、出雲郡の「宇賀里」にあります。「唐川」、「別所」地区（平田市）ですね。一昨日も、私は現地へ行ったのですが、現に、道という道、山という山、殆んど緑青がついた岩石がズラッと連なっているんですね。

実は、なぜそこをめざしたかといえますと、そこに「韓鎗社」というのがあります。これは『風土記』の社ですね。そして、延喜式では、「韓竈社」（かまど）と書いてありますが、やはり釜でしょう。

これは、明らかに「韓鍛冶」の、朝鮮半島の鍛冶技術を持つところの、そういう渡来人たちが、あそこに定着したところだと思えます。ご承知のように「カラカマ」の「カマ」は、朝鮮語の *kama*（窯）でありまして、要するに「焼き物の窯」ですね。ですから、これは「溶鋳炉」と考えてよろしいわけで、そういう「風土記」の社をもって弥生時代の云々ということとは、時代ギャップがあると思いますが、少なくとも『風土記』では、「韓鎗」の「溶鋳炉」の神を祭った一族がいた。今日でも、唐川

地区は「荒木姓」なんですね。その（地区の）全部が「荒木姓」です。（約六〇戸）これは、金達寿さん流のことばだといわれるかもしれませんが、「アラキ」とは「安羅から来た人」たちのことではなかったろうか。

その人達が韓の錘神を祀って、そこで産銅生活に入っていたと思うんですね。私は、弥生末期には、もう、既にそういう状態があったと思うんです。

あれだけの銅鉱が露頭しているのを見れば、当然、朝鮮半島の先進地の韓鍛冶技術をもっている人たちはあの十六鼻という朝鮮名のある港へ着いているわけですから、そういう人達が、あそこに定着したわけです。

#### ○ 検証十一 使用原料銅の問題

速水説は、材料現地調達、現地製作説にとつて、強力な補強力を持つものであるが、使用銅原料船載説も強いので、一応見てみよう。

まず、中国からの輸入銅であろうとする説で、この説をとる学者は多い。この説によると、銅剣も銅鐸も、銅鏡や銅矛も、鉄文化の進展によつて不要となった中国の銅廃品が、中国から直接、または朝鮮半島を経由して国内に入ってきて、それが原料となったのだろうといっているのである。

また、直木孝次郎氏は、『日本の歴史』①「倭国の誕生」の中で

対馬における、朝鮮船載の車馬具や青銅利器と、その付属金具などの出土状況から、朝鮮から、一種の廢材が、銅原料として入ってきたと考えられる。

と説いておられる。

しかし、荒神谷で発見された銅剣は、未だ成分の分析、検討がなされていないということであるので、地元の銅か、大陸からの輸入銅であるのかについて、結論を出すのはむづかしいが、唐川、別所の露頭銅鉱や、山口県にあって、日本最古の銅山といわれている「長登銅山」、これは、聖武天皇発願の奈良東大寺の「毘盧舎那大仏」造成の材料たる銅の献上銅山として有名で、ここも近い。さらにいえば、石見銀山として有名な大田市の大森鉱山も、銀の産出量が底をついた江戸中期以降も、明治初期に至るまで、銅の採掘だけは続けられていたといわれるように、銅埋蔵の山であったわけで、中国山地には、古くから銅や鉄が豊富に堀り出され、昔から、これらの鉱山の支配権をめぐって、繰り返し繰り返し戦いが行なわれ、吉備の王「温羅」にしても、大江山の「酒頭童子」にしても、さらには、出雲の「目一つの鬼」すらもそうであるように、中央勢力から鉱脈を奪われ、敗北の中に消えていった在地、先住の産銅・産鉄集団の王たちは、例外なく「鬼」として、悪者、討たれて当然の者」としての烙印を押されて、社会の体制の外へ抛り出されてしまっているのである。

話が少し横道に外れたが、要するに、そういう場所があり、そういう人達が居たということは、朝鮮半島南部から渡来して、西出雲に住みついた産銅技術者や、銅剣等の青銅器製作技術者達が、この地に君臨する王者の命を受けて、この地において、祭器たる銅剣を製作したとみて、その妥当性を否定されるところはないような気がする。出雲型」とい

われる、この「中細形銅劍」の製作期間が意外に短時間だったらしいといわれるのは、「原イヅモ国」の短命であった命運を暗示しているようである。

### 三、重複の弁（結論）

そこで、史料の語るところに従って、韓鏗のある所が、この銅劍の製作の場所であつたろうといえ、最も簡単でわかり易い結論の出し方になるだろうが、冒頭に主張したとおり、私は、この件に関しては、私なりのユメを語りたいと思っている。冒頭の主張を、締めくくりの意見として、もう一度持ち出してみたい所以である。

「神庭」という所は、神々が集まって大祭を営む祭祀の広庭で、近くは岡山県をはじめとして、全国各地に散在する。

「原イヅモ国」というべきか、弥生中期後半から、後期初頭の西出雲の連合国を構成する首長たちは、毎年、春秋の大祭には、神の宿る仏経山を前にしたこの神庭の広庭に集まり、連合王国の巫女王ウヤツベは、その大祭を迎える準備として、銅を集めさせ、帰化工人たちを督励して、集まってくる首長たちの数だけの銅劍を作らせ、これを、祭りの間中神前に供えて神霊を入魂させ、大祭を終えて帰る首長の一人ひとり、この神の依りしるたる銅劍を与えて持ち帰らせ、これを御神体として祭り合わせることによって、連合王国の結束と協力を図ったのであろう。

従って、銅劍製作の場所は、ウヤツベの宮処周辺か、神庭の祭場に近

い谷合いのどこかであつたろうと思う。あの三五八本の銅劍の発見された丘とともに、狭い盆地を囲む山々の谷のどこかに、銅劍製作の工房の跡や、工人達の住居の跡が眠っているような気がしてならない。

だからこそ、滅亡の儀式として、神霊のこもる銅劍を集めて埋める場所も、当然、神庭の広庭を見下ろし、仏経山を望む、この谷でなければならなかったし、三五八本の銅劍があつても、不思議でもなんでもないのである。

※この論文は島根県斐川町教育委員会主催『第三回荒神谷遺跡の謎を解く』の入賞作品です。